

MAPPS セミナー 020

データベースと展示業務

平成 26 年 10 月

ミュージアム I T を活用した展示業務と聞くと、高精細な画像など展示物そのものか、情報コーナーといった展示サポートツールを思い浮かべがちだ。だが、I T の活用場面は展示室の外にも存在する。そこで本稿では、その代表的な例である「内部業務」に焦点を当てる。

展示と I T の相性や効果について、前回と同様にミュージアムインタビューから掘り下げてみると、I T は展示の準備段階からして非常に貢献度が高いことがうかがえる。

ミュージアム・インタビューとは

早稲田システム開発の代表がシステム導入館の担当学芸員を訪ね、導入の動機、効果、課題、運用上の苦労話や将来構想などをヒアリングし、インタビュー形式で公開している連載記事。2005年11月に開始し、今年7月に100館に到達。9月現在では102館分の記事を以下のURLに掲載している。

<http://www.waseda.co.jp/voice/interview/>

1. 展示内容を検討する**【ミュージアム・インタビューより】**

展示のテーマをひとつのキーワードとして、データベースを検索するとしますよね。そうすると、キーワードに関連する作品がずらっと表示されるでしょう？ この画像リストを見ながら選ぶ、という流れです。(私立美術館)

アルバイトの職員に「好きなテーマで検索して、結果に合わせて資料を並べてみて」と頼んだことがあったんです。そうしたら、そのまま小企画展のプランとして使えるレベルのものが出来上がってしまいまして(笑)。(公立博物館)

関連性の高い資料データをすぐ取り出せると、研究や展示企画の仕事がとてもスムーズになります。(公立博物館)

展示内容を考える際に、学芸員は専門家としての＜知識＞と館職員としての＜記憶＞をフルに活用して検討する。しかし、どんなに優秀であっても、人間の記憶には限界がある。

「思い出す」という行動は、無意識のうちに偏りなどが発生し、抜けや誤りが生じることもある。データベース内に蓄積され

た情報は、こうしたミスの発生を未然に防ぐ役割を果たす。

システム内で検索を行うことは「思い出す」行為に等しいが、より迅速に、正確に目的の情報を抽出する。上では展示内容の検討の品質やスピードの向上が指摘されているが、日常業務の中でも同種のメリットを得ることは言うまでもない。

【ミュージアム・インタビューより】

「御主人が画家、奥様が文学者」ということもあります。館をまたいだデータ共有までできれば、それにも対応できますよね。(公立美術館)

まず油彩のリスト、次の立体作品、それからドローイング、と別々にリストアップして、あとで統合するという使い方ができます。(公立美術館)

データベースが館内情報を共有する上で大いに貢献することについては、前号で触れた。展示業務に際しても同様で、自分自身の担当分野に加えて、担当外の分野まで横断的にデータを検索することができれば、展示資料(作品)の候補の幅を大きく広げることにつながる。これも、「個人の記憶に頼る」手法では実現困難な「I Tならではの」メリットと言える。

一般的に言って、異分野の担当者が協力してひとつの展示を行うのは、スケジュールなどの都合で難航するケースが多い。こうした複層的な展示企画でもデータベースシステムが活

躍するが、アイデア次第ではさらに有意義な利用法を見出すこともできる。

たとえば、企画立案が長期化する場合は、ピックアップした候補資料(作品)の検討リストをそのまま保存しておけば、複数の職員でそれを情報を共有して協議に使用したり、分野ごとのリストを後で統合したりといった作業も能率化できる。

業務や思考の進行と保留を、あたかもプレイ(再生)とポーズ(一時停止)ボタンを押すような感覚で選び分けることができ、しかもミスを極小に抑える。これもI Tの利点である。

2. 展示素材を保存・再利用する

【ミュージアム・インタビューより】

以前作ったキャプションがデータに保存されていないで、改めて作っているようではダメなんです。(公立博物館)

たとえば同じ作品の解説文でも、テーマや用途で書き方が随分変わりますよね。「その解説は何のために、どんな判断で書かれたのか」といった情報が蓄積していくと、それ自体が情報になるのですよ。過去に書いた解説を複数から選んで活用できることになりますから、結局は自分たちの仕事に役立つんです。(私立美術館)

たとえば、展覧会のポスターの画像データにしても、当館には××年分のストックがありますので。(公立美術館)

同じ資料(作品)を展示に出す際、前回使用した解説やキャプションの原稿が保管されていなければ、同じ原稿をゼロから作成することになる。いかにも「二度手間」に感じるが、学芸業務の現場では意外に少なくないのが実情である。

こうしたテキスト(文字)データの取り扱いがI Tが最も得意とする分野だが、システム内に蓄積しておけば、業務の能率向上のほかにもメリットが発生する。実は、品質の向上につながることも多いのだ。

同じ資料(作品)に対する原稿でも、ブラッシュアップする作業が容易であるため、使うたびにバージョンを更新していくケースが多い。これを繰り返すことで、その資料(作品)に対する「決定稿」へと仕上げていくことができるのである。

ポスターやチラシのデータについても同様のことが言える。前の版をストックしておくことで次の原稿にそのまま使ったり、デザインを改変することができるため、プロモーションも必然的に洗練されていくことになる。また、特に歴史の長い館なら、

過去のデザインを参考にできるだけでなく、展示企画の検討資料としても活用できそうだ。

このように、展示企画という「職人的」な業務であっても、システムが果たす役割は極めて大きい。インタビューの声を並べてみると、使いこなされているシステムは、適切な情報を必要なタイミングで差し出してくれる「有能な秘書」のような存在になることがわかる。単に業務をラクにするだけでなく、質の向上に直結するのがI Tの魅力と言えるだろう。

今回は、展示以外の業務におけるミュージアムI Tの役割について考察する。